

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成19年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : 異文化相互批評が可能にする高度人材育成
 機関名 : 多摩美術大学
 主たる研究科・専攻等 : 美術研究科 デザイン専攻
 取組代表者名 : 岩倉 信弥
 キーワード : 芸術諸学、美学、美術史

1. 研究科・専攻の概要・目的

(1) 研究科・専攻の概要

① 学生数と教員数 (平成21年5月1日現在)

学生数

博士前期課程・・・268名

絵画専攻 120名、彫刻専攻 15名、工芸専攻 21名、デザイン専攻 88名、芸術学専攻 15名

博士後期課程・・・24名

教員数

専任・・・98名

絵画専攻 25名、彫刻専攻 6名、工芸専攻 6名、デザイン専攻 46名、芸術学専攻 15名

② これまでの教育研究活動の状況

本学の大学院美術研究科は、1964年に私立美術大学最初の大学院として設置され、以来、芸術創造に携わる人材を育成する使命と機能を果たしてきた。院生は、美術やデザインの知識と技能をさらに深め、豊かにして、より高度な作品への結実を目指し、創造活動の源である自由な創意の表現と独自の能力の開発に全力を傾け、独立の道を歩むこととなる。

③ 課題等

本来の芸術活動が開かれた場で行われる文化活動の一環としての役割を担っている限り、現今の科学技術の発展による急激な社会状況の変化の影響は避けられない。アーティストもデザイナーも、単なるスペシャリストとしてこれまでの個々分立した狭い視野のなかにのみ閉じこもっていることは許されず、むしろ進んで自分の境界を超え、ほかの芸術ジャンルとの相互関連と交流に、開かれた場を求める必要に迫られている。これからの芸術活動は、芸術作品の創出のみならず、自己を取り巻く芸術世界の革新をも同時に視野に入れてこそ、はじめて自己の作品に未来を見据えた芸術性と学際性や国際性のグローバルな視点と要素を付与する、開かれた芸術作品の創出が可能となる。その理想のさらなる具体化と充実化に向け、大学院は毎年多くの外国人留学生を受け入れて国際交流の機会の多様化を図っている。また1995年以降、昼夜開講の教育制度を採用、就労者を含む社会人の美術志望に幅広く応える体制を整えている。

④ 人材養成目的

これまで大学院美術研究科修士課程において、芸術創造に携わる人材の育成を使命とし活動を行ってきた。2001年、美術分野の教育研究のさらなる発展に向け美術専攻の博士後期課程を開設し、従来の修士課程は博士前期課程（絵画専攻、彫刻専攻、工芸専攻、デザイン専攻、芸術学専攻）とした。さらに3年間の博士後期課程（美術専攻）において高度の専門職、研究者を育成することをめざす。

2. 教育プログラムの概要と特色

このプログラムでは、大きく二つのことを実行した。ひとつは、世界を舞台にした「アート&デザイン国際講評会」（インターナショナル・クリティシズム）の立ち上げと実現である。私たちと同じく講評会を中心に横軸教育（超領域型教育）に取り組んでいる教育機関と共に、学生主導型、学生同士の活発な「講評会」を実現したいと考えた。もうひとつは、世界中の学生がここに参加してほしいという願いをこめて、「クリティカル・ノート」というアーティストインデックスを、私たちだけでなく、世界中の学生と共にインターネット上に作り上げていった。中国・韓国・フィンランドの各協定校と事前協議をおこない、2007年度に研究会の立ち上げをおこない、2008年度以降は、クリティカル・ノートをツールとして用いながら、第1回（中国：清華大学）、第2回（フィンランド：ヘルシンキ芸術デザイン大学）、第3回（日本：多摩美術大学）、第4回（日本：多摩美術大学）、第5回（韓国：弘益大学校）、第6回（中国：中央美术学院）まで、計6回の「アート&デザイン国際講評会」を世界各国で開催した。また、2010年度からは、これらの活動の準備やプレゼンの訓練なども含めて、多摩美術大学の「アート&デザイン」という授業に落とし込み、カリキュラムとして今までの活動を定着させることとなった。

(1) 支援期間内に実施しようとした取組

国際的な教育機関との連携の中で相互批評教育「インターナショナル・クリティシズム」（国際講評会）を実現、それを高度美術・デザイン教育の磁場として、柔軟で想像力に満ちたディレクター型人材を育成していく教育カリキュラムの創出を目指すものである。

(2) 支援期間終了後に期待された成果

支援期間終了後は、継続に必要な費用は大学が負担し、同内容・同規模の「インターナショナル・クリティシズム」を継続していく。全国的に、この「講評会」を主軸にした教育カリキュラムが各教育機関で立ち上がっていくことを期待している。

(3) 養成される人材像

さまざまな状況に柔軟に対応でき、閃きに満ち、人的交流に積極的に励み、自信を持って自分の世界観を提示できる人材。

(4) 独創的な点

本学では、学部から博士前期課程・博士後期課程まで習慣づけられている発表会形式の審査会・評価会を「講評会」と称している。博士前期課程では2年間で4回、博士後期課程では3年間で6回程度開催される。この本学で取り組まれている「講評会」を、海外の芸術系教育機関（大学院レベル）との連携の上に組み立て、双方の学生による作品発表・研究発表に対し、双方向の批評を加えようとするものである。ここで期待するのは、言語、習慣、宗教、経済、文化、歴史、芸術素養、総合的な価値観などから生じる異文化間の健全な衝突であり、それを乗り越え、理解し合い、人的交流を育成することである。

「学生の作品と批評を中心に据える、」ことで、はじめて可能となる高次元の交流であり、高度な美術・デザインの分野での人材育成へとスムーズにつながっていく。

(5) 「クリティカル・ノート」というコミュニケーション・ツール

「インターナショナル・クリティシズム」開催に先駆けて、双方の学生が、制作中の作品、研究サマリーなどを収録しておく公開型のデータベースである。双方の学生は「クリティカル・ノート」を日常的なツール、制作のプロセスを記録するダイアリーとして使いこなしていく。「インターナショナル・クリティシズム」に参加する学生の選出は、双方が、この「クリティカル・ノート」を参考にしながら進めることになる。

3. 教育プログラムの実施結果

(1) 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

① カリキュラムの実施状況

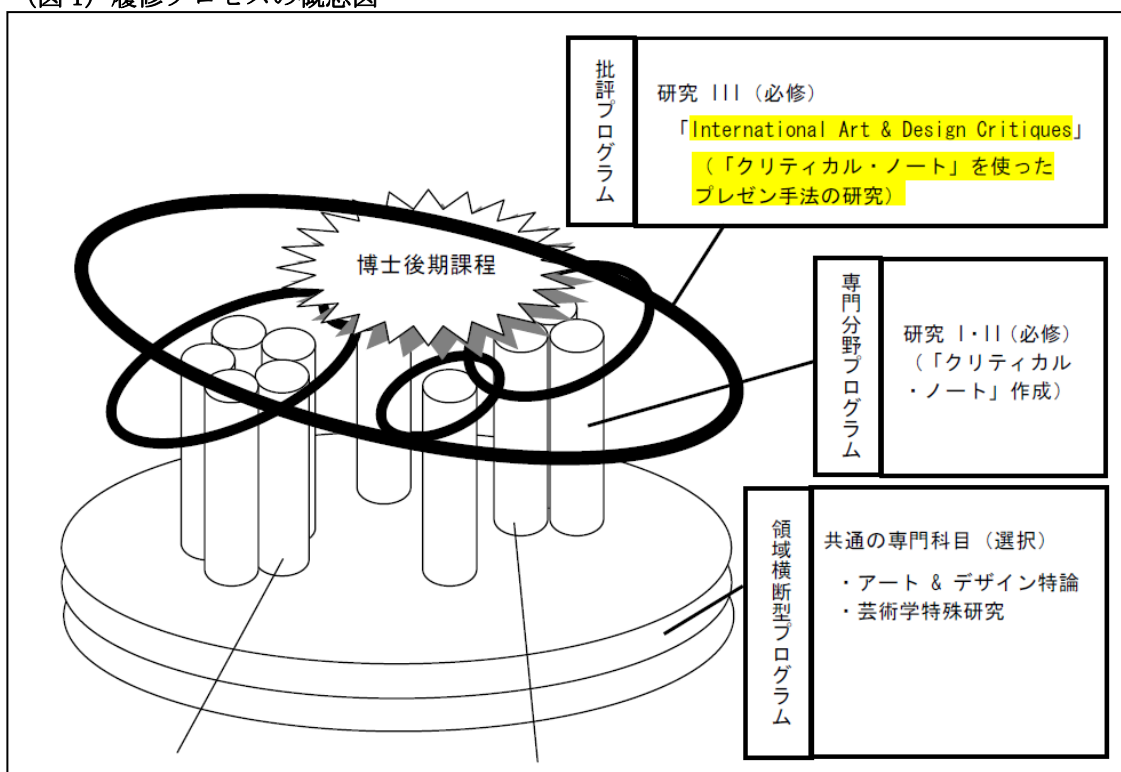
「アート&デザイン特論」

絵画・彫刻・工芸・芸術学を含む全専攻を対象にした選択必修科目。芸術からデザインまで各領域から選出された教員が作家・デザイナーとして講義をするオムニバス形式の教養科目。授業のセンターコンセプトを「魅力・価値・創造」とし、各領域からの幅広いもの見方に触れ、高度で幅の広い人間形成に役立てる。

「デザイン研究Ⅲ」

実技科目である「デザイン研究Ⅰ・Ⅱ」に並行し、デザインの専門性に応じた研究方法を学ぶ演習科目として、各領域がそれぞれ指導に取り組んできた。本プログラムは、「デザイン研究Ⅲ」の中に、6つのデザイン領域が共同して指導を行う「共通講義」を設け、デザイン分野の大学院で学ぶ学生が研究計画を遂行するための技能を総合的に修得することを目指した。同時に制作・研究の過程をデジタル記録する「クリティカル・ノート」との連動と、海外の大学と合同で行われる「国際講習会」での実践に向けて、専門研究をサポートすることもねらいとしている。

(図1) 履修プロセスの概念図



② セミナー・インターンシップ・シンポジウム等の実施状況や具体的事例

「-Art & Design 高度人材教育のための-領域横断型教育の現状/課題/今後の取組み」と題して2008年2月29日・3月1日の2日間本学八王子キャンパスにて研究会を開催した。岩倉実行委員長は縦軸的教育のみでなく横軸の必要性を講演した。本プログラム参加校の海外大学教員は自国の国際戦略を披露し、今後の領域横断の在り方を講演、各大学の取り組み事例の発表も行われた。国内参加大学教員によるパネルディスカッションが行われ各々の現状が報告された。高橋実行委員より異文化交流、領域横断型教育の具体的手段としてクリティカル・ノートの紹介を行った。また、院生による作品発表が行われ、国際講評会トライアルとして実施され、領域を超えて教員、院生相互に理解を深める機会となった。

③ 海外教育研究機関への大学院生の派遣状況

2008年度

- ・11月25日～12月1日 中国・北京・清華大学美術学院にて国際講評会、大学院生28名派遣
- ・1月4日～12日 フィンランド・ヘルシンキ芸術デザイン大学にて国際講評会、大学院生15名派遣

2009年度

- ・10月22日～27日 韓国・ソウル・弘益大学校にて国際講評会、大学院生25名派遣
- ・11月26日～12月2日 中国・北京・中央美術学院にて国際講評会、大学院生25名派遣

④ 大学院生の研究プロジェクトへの参加状況・具体的事例など

海外教育研究機関への大学院生の派遣状況に加えて次の通り

2007年度

- ・2月29日～3月1日 本学八王子キャンパスにて研究会、作品発表大学院生16名

2008年度

- ・3月6日～7日 本学八王子キャンパスにて国際講評会、作品発表大学院生22名

2009年度

- ・7月18日～19日 本学八王子キャンパスにて国際講評会、作品発表大学院生24名

⑤ 取組の実施による現時点での大学院教育の改善・充実の状況

【国際講評会】

国際講評会の組織運営は、学長を頂点とした執行委員会、及び実行運営委員会が行った。予期せぬことだが、大学院生が領域を横断した自主的組織(名称:パウダー)を形成し、開催について協力を行った。それにより組織運営上、一方的な教育改革ではなく大学院生と教員が相互理解を尊重しつつ推進することになった。また、学生組織パウダーは、年に数回独自の展示を学内で行い講評者として専門領域外の教員も招聘し自主的に講評会を開催した。このグループは次年度の大学院生に受け継がれ、学外での展示を芸術学専攻の学生らと企画して開催した。国際講評会運営進行では芸術学科の大学院生が専門領域の特性を活かし、展示担当の教員とともに会場図面を基に作品の配置や展示方法、講評会の順路、全体のタイムスケジュールを検討した。講評会に参加する大学院生自身も講評を受けるだけでなく準備、進行する役割を分担をした。国際講評会後のアンケートでは、多くの大学院生が授業以外でも学内の交流を深められたことが有意義であったと述べている。海外の教員や学生との交流は異文化をもつ国民性をお互いが意識することと、互いに共通の悩みや喜びを語りあった。海外からの学生が来日した折の本学の大学院生の対応も、渡航した折の先方の大学院生からの手厚いもてなしにホスピタリティーの大切さを学んだ。彼らが築いた相互の信頼関係は、海外で活動を始めた修了生と現地の大学院生の間で異文化を越えての交流に発展している。本プロジェクトを通して学生の達成感

だけでなく教員同士の学内及び国際交流も深まった。次年度へ向けてカリキュラム化を行っているが、同時に海外提携校との新たな契約締結も進んでいる。

【クリティカル・ノート】

プログラムにいくつかの改良を加える必要があり、ひとつずつ積み上げながら進めて行った。学生の中には、クリティカル・ノートを新しく増えた本棚、テーブル、ポートフォリオのようにとらえ、作品ができる度に逐次入力していた例もあった。

【カリキュラムの実質化】

本プログラム関連科目である「アート&デザイン特論」の芸術分野における横軸の領域横断に成功した実績をふまえ、2010年度からは講義科目から演習科目に切り替え、「アート&デザインⅠ」「アート&デザインⅡ」という2科目に発展させることになった。「アート&デザインⅠ」ファインアートからデザインまでの領域を横断する演習授業とし、異分野のベーシックな実技課題の制作と講義によって一人一人が他領域の理解を深め、将来における創造思考をより豊かにすることをねらいとする。「アート&デザインⅡ」本演習の目的は、専門領域横断型の講評会を数度にわたって開催し、その準備、展示、プレゼンテーション、相互批評、コミュニケーションなどを通じ、より高度な表現者、研究者たる資質を鍛え上げ、盤石のものにするところにある。2009年度まで開講されていた「デザイン研究Ⅲ」は、研究論文の作成と発表に関する補助的な授業で、修了要件として作品だけでなく論文の提出も課されるデザイン専攻の開講科目であった。大学院博士前期課程の基礎教育として、美術研究科デザイン専攻における研究やプレゼンテーションの方法を一括して修得すること、もうひとつは、制作・研究の記録をデジタル入力・保存・公開する「クリティカル・ノート」との連動と、海外の大学と合同で行われる「国際講評会」に向けて、準備や発表をサポートすることを目的としていた。今回のプログラムで改良を重ねた結果、2010年度より「デザイン研究Ⅲ」を「研究指導」という新科目に発展させた。研究指導」大学院における本格的な実技と論文作成の両立を目指した専門的な演習科目と位置付け、各研究領域における指導体制に分散することとした。同科目新設に際して、これまで実技のみで修士号の授与が可能であったファインアートの分野においても、2010年度入学生から論文の提出が必須となった。実技指導と連携しながら研究方法の指導を行うとともにクリティカル・ノートの入力を積極的に進めることを目的とする。また、「デザイン研究Ⅲ」において実施した「共通講義」を発展させ、論文指導とプレゼンテーション教育を総合的に教育する「論文基礎」を2010年度後期から、論文の書き方をテスト形式で添削する「論文添削」を2011年度前期から開講予定とし、修了研究における実質的な理論と実践の両立をめざし、美術大学の博士後期課程における、総合型研究者養成に備えるよう進めている。

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により得られた成果

① 就職率

→幅広い知識を身に付けた上で、作家として活動指定校という学生が多いため、就職率そのものには大きな変化は見られない。企業への就職から学校の教員への就職が増加。

② 入学志願者数

→やや増加の傾向。本学大学院 GP の HP を見て志望したという受験生が増加。

③ 定員充足率

→ほぼ変化なしで推移。

④ 学生の活動量（論文や学会発表数）等

→本プログラム参加者を中心として、学生主導の領域横断型展示会や講評会等が開催された。

⑤ 定量的なデータに現れにくい顕著な成果についても併せて示してください。

→本プログラムの推進と平行して、学生主導の領域横断型組織「Powder」が発足。「異文化相互批評が可能にする高度人材育成」のテーマに賛同した学生たちの、自主的な運動が発生した。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題と、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画

① 継続してプログラムを実施するに当たり、協定校との資金面での負担割合や、会場提供、事前準備等について各校の学事等と調整を図りながら、スムーズな運営を行っていくことが課題であったが、各協定校と覚書を締結し、各校に大学全体として組織的な対応を依頼した。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の具体的な計画(大学が独自に実施した自己点検・評価報告、各種アンケートの結果等)

① カリキュラム化された、『アート&デザイン特論Ⅰ』・『アート&デザイン特論Ⅱ』により大学の正規の授業としてプログラム内容を引き続き、継続的に実施していく。

(「アート&デザインⅠ」シラバス内容)

ファインアートからデザインまでの領域を横断する演習授業。異分野のベーシックな実技課題の制作と講義によって、一人一人が違う領域への理解を深め、これからの創造思考をより豊にすることを狙いとする。

前 期

- 1 週目 ガイダンス
- 2 週目 高橋周平(講義と課題出題)
- 3 週目 本江邦夫(講義)
- 5 週目 2 週目課題の講評会(科目担当教員より選抜)
- 6 週目 室越健美(講義と課題出題)
- 7 週目 宮いつき(講義/上野毛キャンパス開講)
- 8 週目 6 週目課題の講評会(科目担当教員より選抜)
- 9 週目 石井厚生(講義)
- 10 週目 島尾新(講義)
- 11 週目 佐々木成明(講義)
- 12 週目 中島祥文(講義と課題出題)
- 13 週目 大学院生パネルディスカッション
- 14 週目 1 2 週目課題の講評会(科目担当教員より選抜)
- 15 週目 前期まとめ(前期授業担当教員全員)

後 期

- 17 週目 尹熙倉(講義)
- 18 週目 和田達也(講義と課題出題)
- 19 週目 弥永保子(講義)
- 20 週目 永原康史(講義)
- 21 週目 1 8 週目課題の講評(科目担当教員より選抜)
- 22 週目 田淵諭(講義と課題出題)
- 23 週目 堀内正弘(講義/上野毛キャンパス開講)
- 25 週目 2 2 週目課題の講評(科目担当教員より選抜)

- 26週目 安藤礼二(講義と課題出題)
- 27週目 小林敬生(講義)
- 28週目 26週目課題の講評会(科目担当教員より選抜)
- 29週目 武田州左(講義)
- 30週目 大学院生パネルディスカッション
- 33週目 全体まとめ(参加全教員)

(「アート&デザインⅡ」シラバス内容)

本演習の目的は、専門領域横断型の講評会を数度にわたって開催し、その準備、展示、プレゼンテーション、相互批評などを通じ、より高度な表現者、研究者たる資質を鍛え上げ、磐石のものとするところにある。大きく次の3要素で構成される。1) クリティカル・ノートを使用しながら、デジタル・ポートフォリオの制作やプレゼンテーションを行う。2) 数度の講評会を準備、開催。3) 参加は選抜になるが、毎年若干名は、海外提携校で開催される「Art & Design 国際講評会(co-core)」に参加できる。この選抜方法については、授業内で伝達する。

前 期

- 1週目 ガイダンス
- 2週目 クリティカル・ノートの使用方法ガイダンス
- 3週目 クリティカル・ノート登録
- 5週目 クリティカル・ノート登録
- 6週目 クリティカル・ノート登録
- 7週目 クリティカル・ノート登録
- 8週目 学生と複数教員によるクリティカル・ノートを使用したセッション
- 9週目 学生と複数教員によるクリティカル・ノートを使用したセッション
- 10週目 学生と複数教員によるクリティカル・ノートを使用したセッション
- 11週目 プレゼンテーションについて(グラフィック、情報デザイン学科担当)
- 12週目 展示方法について(環境、プロダクトデザイン学科担当)
- 13週目 特許庁派遣の弁理士による意匠権、特許権の講義
- 14週目 国内講評会準備
- 15週目 国内講評会1

後 期

- 17週目 国内講評会準備
- 18週目 国内講評会2
- 19週目 国内講評会準備
- 20週目 国内講評会3
- 21週目 国内講評会準備
- 22週目 アート&デザインⅠとの合同授業
- 23週目 国内講評会4
- 25週目 国内講評会準備
- 26週目 アート&デザインⅠとの合同授業
- 27週目 国内講評会5
- 28週目 大学院生による国内講評会報告会
- 29週目 アート&デザインⅠとの合同授業

30週目 大学院生による国際講評会報告会

33週目 全体まとめ（参加全教員）

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表

① ホームページへの掲載について

ホームページ作成 <http://www.tamabi.ac.jp/co-core/>

② 活動報告書

2007年度成果報告書、2008年度成果報告書、2007-2009年度成果報告書発行

③ パンフレット等の作成・配布について 等

REPORT 2007-2009 発行

2010年3月8日～10日 原宿クエストホールにて成果報告会開催

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果

私たちが特色としてとらえている批評教育を主軸においた本取組みに対し、文科省からご理解をいただき、GPとして採択いただいたことは、大変、光栄なことであった。深いご理解と3年間のご支援に対し、厚く御礼申し上げます。大学院教育は、本GPを経て、大きく変わろうとしている。この点、ご報告。

批評教育の効果

作品制作と展示、研究発表は、本学のもっとも馴染んだ教育の現場そのものである。そうした場では、指導教員のみならず、発表の場に参加した学生からも積極的な質問や、改善点の提案がなされる。私たちにとり、この批評的視点は、作品を鍛え上げ、研究をより深いものとする大変有効な手だてだと認識していた。こうした他大学にはまれな美術・デザイン教育の熱気を、本学の特色であると強く認識し、すべての根幹とするところから本取組みははじまった。

① 縦と横の共存

本学大学院教育は、各専門領域の研究室体制が基盤となって運営される。この絶え間ない知識と技術の鍛錬の場（縦軸）に、もうひとつ、横軸の広い視点を与えることとした。専門、ジャンルを超えて、上記講評会を行い、そこにこれまで通りの批評の視点をおくことにしたのである。このことが、「Art & Design 国際講評会」として結実した。

よりいっそうの広がりへ

私たちの海外提携校へもこの Art & Design 国際講評会の広がりを提案することとした。本ご報告にある通り、支援をいただいた期間だけでも4回、学生を海外に派遣し、ともに展示、講評という大変充実した時間を共有した。また、本学にも、2度、複数校から25名程度の学生を招くことができ、こちらは、大変大きな展示、講評の場となり、刺激的な数日間をともに過ごした。学生同士の活発な交流は、この取組みの健全さを物語っていたと思う。

② 一過性で終わらせないために

展示、講評は、熱気に包まれた濃密な数日間である。そこで主体といえる学生とその作品を記録にとどめるために、クリティカル・ノートというデジタル・ポートフォリオのシステムを開発、実施した。Art & Design 国際講評会に先立って、本学、海外の学生は、ここに作品を登録し、ともに閲覧したり

コメントを交わしたりしている。その上で Art & Design 国際講評会が実行されるので、いっそう効果を高めている。

③ カリキュラムへの展開

横軸教育のカリキュラムにとって、最も重要なことは、熱意を持って継続する、ということにほかならない。本 GP で培った 3 年間の経験を生かし、2010 年度から、大学院に日本の横軸系演習授業を組み入れることとした。ひとつは、「アート&デザイン I」というもので、主に院 1 年生を対象とする選択科目となっている。各分野から通年にわたり講義を行い、関連する演習課題が出される。さらに、その課題の結果を授業内で発表・講評（講評者は各専門からの複数教員）する。横軸の多様性の中で、応用力と、プレゼンテーション力を学ぶ場としていい設計ができたと自負しております。もうひとつは、その発展系として院 2 年生を主体とする「アート&デザイン II」である。ここでは、年度の最初にクリティカル・ノートへの作品登録をすませる。作品は、増えるに従って随時更新する。そのデジタル化されたイメージをスクリーンに投影しながらプレゼンテーションと、講評を行う。作品は現物、ポートフォリオなどの併用が可能である。そして夏休み前に、大掛かりな展示と、10 名を超える教員の講評会が開催される。また後期になりますと、優秀な学生は、海外で開催される Art & Design 国際講評会に派遣する（20～25 名を予定）。いずれの授業でも、設計は完全に領域横断の横軸のものとなっている。また講評会に代表される批評教育を、学生に数多く体験させようとのねらいも持っている。

④ 高度人材育成に向けて

ご支援終了後も、私たちは、GP 期間と可能な限り同じ内容、密度、熱意を持って、学生たちに好環境を提供したいと努力している。それは、この GP 期間において、教育効果に目覚ましいものがあつたからと実感しているからである。彼らは、当初、専門外の表現に触れ、同じ空間に作品を置くことに躊躇やためらいがあつたはずだし、担当教員以外の教員（海外からの教員も含まれます）の発する思いがけない講評、批評に身をすくめたり、違和感を持ったかもしれない。しかし、一度経験すれば、あつという間に彼らはその意義を理解し、積極的に Art & Design 国際講評会の場に飛び込むようになった。また、海外提携校を訪問したときには、その国の文化や、作品のとらえられ方に常に刺激された。こうしたことが自信となり、ずいぶん逞しく成長したと私の目には見える。もとより、研究や作品制作には、その専門の環境や鍛錬が欠かすことはできません。その上で展開される横の広がり、彼らにとってなくてはならない刺激の場であり、遠からず社会に出るための理想的な準備の経験になる。明確になったこうした教育効果をこれからもいっそう継続し、高めていく心づもりである。

⑤ 教員の交流

大学院の専門を超え、ファインアート、デザイン、芸術学、共通教育の教員がそれぞれ役割を分担しながら、この GP は成功にたどり着いた。上記新設しました 2 科目にも、専門を超え、何人もの教員がかかわっている。このことが、これから GP の遺産を大きく育てることに役立つ。もともと「Art & Design 国際講評会」を実現したいという発想は、横軸教育への意識と熱意を持つ教員の間で FD 的に組み上げられてきたものであつた。それが GP 採択にまでたどり着いたことは、大学院内の改革ムードを刺激し、高揚させたことは言うまでもない。教育プログラム、カリキュラムというものは、一カ所にとどまることなく、これからもたゆまず改良していくべきである。これからも縦の専門教育に対しての横軸の広がり、その連携と効果を期待している。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の大学による自主的・恒常的な展開の為の措置

① 覚書の締結

当該教育プログラムの期間中に日本、中国、韓国、フィンランドの各校と計6回の「アート&デザイン講評会」を実施した。当該プログラム期間中は、多摩美術大学がほぼ単独で、講評会に必要な資金的・人的資源を提供していた。この「異文化相互批評が可能にする高度人材育成」プログラムを各校と行っていく中で、趣旨と意義を協定各校と共有することができ、プログラム終了後も、各協定校が対等に資金的・人的な資源を捻出し、引き続きこのプログラムの理念を守りながら活動を続けていこうという意見が各校から出てくるようになった。その結果、中国：清華大学、韓国：弘益大学校、フィンランド：ヘルシンキ芸術デザイン大学（現：アールト大学）が、各校の了承のもと対等な関係で当該プログラムに継続的に参加することとなった。

② 今後のスケジュール

2010年度は、2009年度に取り交わした覚書に基づき、10月下旬に中国の清華大学美術学院において各国協定校が集まりクリティカル・ノートを用いた、国際講評会を開催する予定である。当該プログラム期間中は、常に多摩美術大学が主催校となり、調整を進めてきた。しかし、2010年度からは、開催校が主催校となり事務局を設置して様々な準備対応を行うこととする。

③ カリキュラム化

また、上記でも述べたとおり、当該教育プログラムでの活動を2010年度より「アート&デザイン特論Ⅰ」と、「アート&デザイン特論Ⅱ」の授業に落とし込み、大学の正式なカリキュラムとして展開することとなる。

「アート&デザイン特論Ⅰ」

ファインアートからデザインまでの領域を横断する演習授業。異分野のベーシックな実技課題の制作と講義によって、一人一人が違う領域への理解を深め、これからの創造思考をより豊にすることを狙いとする。

「アート&デザイン特論Ⅱ」

専門領域横断型の講評会を数度にわたって開催し、その準備、展示、プレゼンテーション、相互批評などを通じ、より高度な表現者、研究者たる資質を鍛え上げ、磐石のものとするところにある。大きく次の3要素で構成される。1) クリティカル・ノートを使用しながら、デジタル・ポートフォリオの制作やプレゼンテーションを行う。2) 数度の講評会を準備、開催。3) 参加は選抜になるが、毎年若干名は、海外提携校で開催される「Art & Design 国際講評会(co-core)」に参加できる。この選抜方法については、授業内で伝達する。

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>本教育プログラムを実施することによって、大学院教育改革に関する大学および大学院生、教員個人に特化される問題の所在が明らかにされている。国際講評会が十全に機能するために、クリティカルノートが活用されており、これを元に他分野の大学院生、他国の大学院生とコミュニケーションが図られており評価できる。このような国際ネットワークの構築は、その他の美術系大学の今後の動向に示唆を与えるものと思われる。また、大学院生主導の「パウダー」が発足し、大学院生が自主的に講評会等を行っていることは、特に評価できる点である。</p> <p>通常の履修科目に、「国際講評会」「クリティカルノート」が組み込まれ、大学全体の大学院改革を推進する上でも評価できる。今後は、さらにそれらの内容を深化させる必要があるだろう。</p> <p>また、本プログラムを継続するにあたり、大学としての予算措置などの支援は用意されているが、大学としての更なる組織的な関わりも期待される。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>批評行為とクリティカルノートと組み合わせ、教育ツールとして活用する場としての「国際講評会」が実施されていることは評価できる。教員、大学院生とも意識の変化が見られ、異国の大学院生とも連帯感が生まれたことは、国際交流の実質化の一つの成果である。さらに、各専門領域（絵画、彫刻、デザイン、芸術学、共通教育）を超えた横断的連携がスムーズに行えるようになったことは評価される。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>大学院生に対する評価システムの確立、自己点検評価システムなど制度面での改善が必要である。</p> <p>「国際講評会」「クリティカルノート」を組み込んだカリキュラム編成の実質化の方向は定まってきたが、今後、「国際講評会」の準備も含めたスケジュール管理、「クリティカルノート」における自己批評を含んだ文章表現教育が必要と思われる。</p>